
そとはたぶん晴れている

ホタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そとはたぶん晴れている

【Nコード】

N4884A

【作者名】

ホタル

【あらすじ】

それぞれの立場のそれぞれの恋愛。

緑の場合（前書き）

二年ほど前にある共同出版の賞に応募して見事落選した作品です。
出来るだけそのまま載せてみました。

緑の場合

「ねえ、100万回好きって言って」

そう言った私に、その日寝るまでずっと俊二は好きだと言ってくれた。

「その跳ねてカールがかった睫毛が好き」

「その大きく輝く目が好き」

「その遠慮がちな小さな鼻が好き」

「この枝分かれした前髪が好き」

「この少し大きめな額が好き」

私を見ながら、時には触れながら、ゆったりと降り積もる言葉に包まれるような温もりを感じ、私は安らかに眠った。

初めての俊二との夜はそうやって深く眠りの世界に滑り落ちた。

朝の早い俊二は、私が起きるころには顔を洗い、トーストとハムエッグ、牛乳だけの朝食を終え、歯を磨き、シャツを着てズボンをはき、ネクタイを締めていた。私は寝たふりをしながらその始終を眺めた。

スーツの上着を着るところで俊二は私が起きていることに気がついた。

「おはよう」

「おはよう」

この瞬間が私は好きだった。

スーツ姿の俊二にパジャマ姿ばさばさの髪型で挨拶を返すのは、何だか恥ずかしかったけど。

「まだ寝てていいのに」

俊二はそう言って私を子供扱いするように頭を撫でた。

「昨日は何回好きって言うてくれたの？」

「128回」

俊二はそう言って微笑んだ。多分嘘であろう数字を、それでもち

やんと答えてくれた事に私は喜ぶ。そして、

「じゃあ、100万回言うのに100年はかっちゃうね」

「そうだね」

俊二はどんな意地悪にも優しく答えたけれど、どんなに本気で言っても、「冗談として捕らえた。

冗談じゃないのに。

「じゃあ、行つてきます」

俊二は笑顔を残したままそう言った。

幸せな言葉は一年かけて一万ほど積み重ねられたところで焚き火のように燃やされて灰になった。

私は一週間ほど泣き崩れ、天気予報による一週間の降水量に負けないほどの涙を流し、その後三日間カラオケで失恋の歌を歌い、観測史上最大の渇きが喉を痛めさせた。

俊二に奥さんがいることは知っていた。

奥さんのことを愛していることも知っていた。

だから私に限りなく優しくかったし、だからこそ私も約束通り自分からは連絡をしなかった。

たった一度を除いて。

今何してる？

手持ち無沙汰で送ってしまった六文字のメールに五分と間を置かず掛かってきた俊二の携帯番号。

「俊二」

と弾んだ声で出た。ただ携帯から聞こえた声は、俊二の物ではなかった。

「お世話になっております。俊二の妻です」

落ち着いた声には私はゾクツと背中から張り詰めるものを感じ、足元からは恐怖が駆け上がった。俊二の携帯に何と登録してあるかは解らなかったが、何にせよ、自分の名前と生年月日を顔文字のピース笑顔で結んだ私のマヌケなメールアドレスは、修二の奥さんに情

報を与え、私を裸にした。

鼓動は小太鼓のように胸を打ちつけ、頭の中はネタが浮かばない漫画家の原稿ほどに真っ白だった。

心音に反比例して時は一秒一秒大太鼓のように重く流れた。

「潮時じゃないかしら」

沈黙を終えて先に声を出したのは俊二の奥さんの方だった。その声は落ち着き払い、まるで槍が降ってこようと微動だにしないのではないかと思わせた。

そう思った瞬間、私の敗北は決定した。いや、付き合った時点で奥さんには負けていた。ただそれでもあえて言うならば、迂闊にもメールを送ってしまった事によって敗北に気づかされたのだ。

相手の言葉にただ私はうんうんと頷いた。

まるでお母さんに怒られている子供みたいだと思いながら。

「後で主人から最後の連絡を入れさせます」

そう言っただけで切れた携帯を握り締めたままぼんやりと窓を眺めた。

窓ガラスは情けない私の姿をかすかに反射させ、暗い闇が向こう側に見えるだけだった。

手元に鳴る携帯電話で我に返ると、いつの間にか点けていたテレビは、九時からの笑い番組がやっていた。

奥さんの電話が切れてから二時間経っていた。

その間に洗濯は畳まれ、部屋は綺麗に片付かっていた。

「わたしがやったのか」

独り言のように呟き、携帯に視線を落とす。

受信メールは俊二からだった。

ゴメン

たった三文字のカタカナでこの恋は終わった。

その日は何が何だか解らないまま、半身浴で風呂に入り、隅々まで身体を洗った。足や手の指先はもちろん、髪の毛一本一本至るまできれいに洗った。

風呂から出、一人でテレビを見ながらレトルトのカレーを食べる

と涙が溢れ、ぼたぼたとボタン飴のような涙が零れた。

この日から方舟を沈めるほどの涙を流した。

俊二と別れてから十日後、彼氏が田舎から帰ってきた。

ただいま

ミキオからのメールに急いで電話をかける。

「ミキオ会いたかったよ」

「俺もだよ」

「今から会えない？」

「うん、じゃあ、一時間後に」

私はミキオの事を愛しく思う。付き合って二年、きっと私たちの関係はミキオだから続いている。

ミキオの旅疲れを気にすることなく、私はミキオの優しさに甘える。一時間後に来たミキオに私は三日間満たされ、大学の春休みはこうして終わった。

ミキオと大学に向かう途中の新宿駅で向うから懐かしい顔が歩いてきた。

俊二だった。

私はミキオに寄り添い出来るだけ顔を見ないようにした。どうか気がつきませんようにと願いながら。私にはミキオがいて、ミキオのことが好きで。

今の私にとってそれが全てだった。

携帯が鳴った。

俊二からのメール。

離婚しちゃったよ

一瞬地面が揺れる。

だから？

ミキオはおはようとも言つように聞いてきた。

「サチから。今日大学休むって」

私はとつさに共通の友達の名前を使い笑顔で答える。ミキオはそう

か。と言ってさっきまで話していた話に戻る。

私はほっとし、ミキオの腕を引っ張る。

「ねえ、私たちも大学サボって携帯買いに行かない？」

「ああ、そっか。お前のいまだに写メついてないもんな」

ミキオの笑顔は爽やかだ。全てが許されるほどに。

私は後ろの喧騒を振り返らずにミキオと共に新宿駅から外に出た。

雲ひとつない空。完全に昇り終える前の太陽が人ごみを照らす。

大丈夫。私にはミキオがいる。

外は思ったより晴れていた。

俊二の場合

翠は精力的で、元気で我儘だった。

言葉を求めた彼女に僕は、子守唄を歌うように何度も好きだといった。

妻がいる自分にとって、唯の遊びのはずだった翠への思いは、いつの間にか遊びか本気かわからなくなっていた。

「100万回すきって言って」

初めての夜そう言った彼女は確かに可愛かった。

私はその日のうちに子守唄の代償として一つだけ約束をした。

翠からは連絡をしない。

妻のことは最初から翠は知っていた。翠が二番目であることも。

翠は辛抱強くこの約束を守った。

その日までは。

その日、朝から会議とインターンの面倒に追われ、初めて自分の携帯電話を家に忘れたことに気がついたのは夕方だった。

携帯、家に忘れています

社員用携帯電話にメールが届いて、私は驚いた。

何故この時間帯なのか。浮気がばれた以外の理由は見つからなかった。

解った

とだけ返しておいた。

急いで仕事を終わらせ、電車に乗りながら、仕事中には無かった焦燥感が私を襲う。

今までやった二度の浮気は二度ともばれていた。何故またやってしまったのだろうか。今回は大丈夫だと思ったのだろうか。

今度も許してくれるとどこかで思ったのかもしれない。

今度やったら離婚です。

彼女はそう言って前回許してくれた。

次の日、会社で必要だった保険証を筆筒から取ろうとして、縁に縁取られた紙には、静子の名だけが書かれていた。前回の浮気をここにきてようやく反省した。

外の景色は流れる。

タタンタタン

繰り返される電車の音を聞きながら、通勤快速に乗った自分を呪った。

考えがまとまる前に電車は下りるべき駅に辿り着いたから。

「ただいま」

返事はない。

リビングからはわびしげな光が漏れる。

ドアを開けると、テーブルの上には携帯だけが置いてあり、静子が座っていた。

「お帰りなさい」

声だけが響いた。

「ただいま」

呻くような声を絞り出す。

自分の携帯に触れていいのか迷い、静子の顔を覗く。

「メール返しました」

静子の声に携帯を手取る。

よろしかったかしら。

話すような視線を送る。

ゴメン

飛び込んだ文字は、当然身に覚えの無いものだった。

静子は私がメールを見るのを確認すると、筆筒から離婚届と判子を取り出した。

「私ももう二十八、もう一度恋愛をするにはもう時間を無駄にしないのです」

何か言おうと思ったが、言葉は出なかった。私は諦め、黙って判を押す。

「では、私はこの家を出て行きます」

呆けている間に、静子はあらかじめ準備されていたバックを持ち出す。

「後は弁護士を通してください」

そう言って番号を書いた紙をテーブルの上に置くのを、私は何も出来ず、鞆を置くこともしないままただ見ていた。

「お元気で」

そう言って玄関の扉を開けた。

「しずこ」

静子に向かって発せられた言葉は、静子の背中に吸収されたまま戻って来ることはなかった。

シャワーを浴び、冷蔵庫に準備されていた夕食をレンジで温め食べた。

静子の最後の手料理を噛み締める。

次の朝は休日だった。朝食が無いのを見て初めて、彼女が家を出たことを理解する。

昼、携帯が鳴った。

番号は身に覚えが無かったが、まだあるテーブル上にある紙を見て弁護士だと気がつく。

一週間私は疲労した。

その間に慰謝料などが決まった。慰謝料は当面の静子の生活費だった。静子の優しさに今更ながら気が付く。

静子と別れて二週間ほど経った朝、新宿駅で緑を見た。

翠の隣には彼氏らしき人がいる。

離婚しちゃったよ

メールを送った。別に何かを期待したわけではなかったけれど、懺悔に近いものだった。自分だけ幸せそうな翠に嫉妬したのかもしれない。

私は会社に向かう。

人事部にはもう伝えた。
何となく視線の痛い日常が私を待っている。

静子の場合

結婚して四年の間に俊二は二回の浮気をした。

初めての浮気は泣き叫んだ。

悲しくて仕方なかったけど、ひたすら謝る俊二が不憫になり許した。

二回目の浮気ときは、男はこういうものだという周りの意見に賛同した。

「しょうがないわよ。男なんてそんな物よ」

「そうなのかな」

「離婚すると大変よ」

そう言った美紀子はxが一つ付いていた。

「やっぱお金かしら」

「まあ、それだけじゃないけど、まずはそこね」

美紀子とは大学の頃からの友達で、行政書士の事務所をちょうど立ち上げたと聞いていた。

「美紀子はいいわ。自立していて」

そう言った私に、

「あなたも取ったら？資格でも」

簡単に言われ、簡単に取れると思ってしまった私は資格を取る決意をした。

久しぶりにやる勉強は楽しく二年目で試験に合格した。

「合格したわ」

最初に美紀子に伝えた。

「ほんと？おめでとう」

美紀子は自分のことのように喜んでくれた。

俊二も少し大げさに喜んでくれ、何だかうれしかった。

私は美紀子の事務所で補助者として働き始めた。

仕事が楽しくなってきたときに、俊二は三度目の浮気を始めた。

俊二の浮気は判りやすい。

まず優しくなり、俊二から匂いが消える。タバコの匂いや汗の匂いはもちろん、石鹸の匂いも、私のかすかな香水の匂いも。

初めてのときは匂がつかなかったが、三回もやられればいやでも敏感になる。

「また？」

美紀子はそう言って他人事のように笑った。

「まあ、しばらくは知らない振りをするわ」

そう言いながら何だか損している気分になったので、私は出来るだけ我儘を言うことにした。

俊二は何の疑いもなく私の言うことをことごとく聞いてくれた。

そんな関係がわりかし楽しかった。

ある日、携帯を忘れた俊二に浮気相手からメールが入るまで。

単純な俊二は浮気相手の名前を会社名にしていた。

会社からメールが入ったら内容を俊二に伝えようとするのは当然なのに。

今何してる？

アドレスに名前と生年月日らしきものが書いてある。

私より八つ若い生年月日に腹が立った。

何だか知らない振りをしているのが馬鹿らしくなって、電話をかける。

律儀に電話帳は顔写真まで付いていた。

話は終始私に優位にすすんだ。

「後で主人から最後の連絡を入れさせます」

このフリーズは我ながら気に入った。

言いたいことを言って切ると、気持ちはずっきりした。

そんな余韻に浸りながら、俊二にメールを入れる。

携帯、家に忘れています

解った

それだけ返ってきた。

少し遅れていた車庫証明の仕事を書き終えると、私は夕飯の支度をした。

何て返信させようか。

夕飯の支度を終わると、手持ち無沙汰になり俊二の受信メールを見た。

浮気相手の受信は消しているせいか一つも無かった。
今何してる？

もう一度そのメールを見ると今更ながらいらついた。
何だか俊二に止めを刺させるのはもったいなくなった。
ゴメン

私はそれだけ入れた。
なんで俊二だけ楽しんでいるのだろうか。
苛立ちは募り、私は俊二が浮気したとき、取りに行った離婚届を箆笥から取り出した。

書類を書くのは幾分得意になった私は車庫証明と同じように離婚届を書き、判を押すと美紀子に電話をする
「どうしたの？」

突然の電話に驚きながらも出てくれた。

「私離婚する。弁護士教えて」

「しょうがないわねえ」

美紀子はそう言ってケラケラと笑った。

十分笑った後、

「あてはあるの？」

美紀子の素に戻った言葉で我に返る。そんなもの無かった。

実家に帰るしかないかな。そう思って、声を出そうとすると美紀子が先に言葉を出した。

「本当にしょうがないなあ。私のところに来なさいよ」

私はどっかで美紀子に期待していたのかもしれない。だから私は美紀子に際その電話をしたのだろうか。

そしてそれは間違いではなかった。

「ありがとう」

私は感謝した。

そこまで言っていると、弁護士の名前と番号を教えてくれた。かりかりとボールペンの音が響く。

離婚を決めると心が開放された気分になった。重要なことを簡単に決めてしまった気がしたけれど、後悔をしない自信はある。

夕飯を食べ終え、自然と作ってしまった俊二の分にラップをし、冷蔵庫に入れ、バックに服をつつめ、離婚届を筆筒にしまい携帯をテーブルの上に置いた。

「ただいま」

俊二の声に急いで椅子に座る。

まるでずっと座っていたかのように。

リビングの扉が開く。

「お帰りなさい」

静かに、だけど力強く言う。

「ただいま」

俊二の声は消えそうなほど小さく掠れていた。

視線が携帯のほうへ向けられる。

「メール返しました」

私が言くと、俊二は携帯を手を取った。

間髪いれずに筆筒から離婚届と判を取り出す。動揺する俊二の姿が滑稽だった。

私はよく我慢した。

自分に言い聞かせる。

こんな俊二だけれども、昔は好きだった。

結婚し、子供は作らなかつたけど、今となつてはそれでよかったのかもしれない。

いざ本当に別れるとなると、少し不安になった。本当に生活はしていけるだろうか。また恋愛が出来るのだろうか。本当はこのまま我慢するべきなのではないか。

でも、反面今しかないと思った。

「私ももう二十八、もう一度恋愛をするにはもう時間を無駄にしないの」

自分でも驚く本音が吐露された。

俊二はこの瞬間何を思っているだろうか。さっきまでどこかで楽しんでいた私の心は少ししよぼくれ始めていた。

俊二の行動を凝視していると、何か言おうとしたが、小さく首を横に振り、判に手を伸ばし触れた。そのまま紙に判を押すとテープルに判子を放り投げるように置いた。

判子は少しだけ転がって止まる。

「では、私はこの家を出て行きます」

自分に言い聞かせるように吐き捨てる。

「後は弁護士を通してください」

予想外に押し寄せる寂しさを振り払うように、言葉に力をこめる。

「お元気で」

足早に玄関へ向かい扉を開ける。

後ろで俊二が何か言っている。

マンションを出ると気が緩み、涙が出た。

「俊二、今までありがとう」

そう言って胸いっぱい深呼吸をした。

春の匂いがする。

そんな気がした。

私は胸を張り、新しい自分を鼓舞する。

「よっしゃ」

私はずんずんと歩きながら美紀子に電話をする。

美紀子は相変わらず笑っていた。

「まあ、早くいらっしゃいよ」

「おう」

私は強く頷いた。

ミキオの場合

「私、ミキオのこと好きだよ」

大学の後期試験が終わり、ほっとした僕は幸子に呼ばれ、そう告げられた。

「どうして」

他に言葉が浮かばなかった。

幸子は付き合っている翠の友達で。三人で時折遊びに行く仲ではあったけれど、ただそれだけだと思っていた。

まだ冷たい風が僕の頬をひたひたと叩いて通り過ぎた。

「ごめん」

そう言った僕に彼女はにっこり微笑んで即答する。

「知ってるよ」

そのままこの関係を壊さないためにというわけの解らない彼女の理論から、二人で三日間の旅行へ行くことになってしまった。

「お待たせ」

「うっん、来てくれてうれしい」

そう言って微笑みながら、助手席に座る幸子は二ヶ月ほど見ないうちに綺麗になっていた。

「何だかわくわくする」

ええ、私は気が滅入って仕方ありませんが。

心の中でそう言いながら、幸子の言葉に笑顔だけで答える。

僕らはそのまま那須ハイランドパークへ向かった。空いた遊園地は好きだ。会話に困ることもなかったし、絶叫マシーンはそれなりに面白かった。

空が暗くなり、僕らは宿へ向かうことにする。車内でも特に話すこともなく、お互い好きなCDをかけ合った。

チェックインを済ませると、迫り来る夕飯の時間に間に合うよう

に温泉へ行くことにした。

「じゃあ、八時にここで」

マッサージ機やソファーのある広間でそう言うと、

「うん」

少し間をおいた後に幸子は小さく頷く。

温泉は広く、心と体が休まった。

どう考えても泊まるのは不味かっただろう。

冷たく突き放すべきだっただろうか。

直ぐに翠に連絡するべきだっただろうか。

三人の関係はもう戻らないところに来ている。

そう思いながら身体を洗い、髪の毛を洗う。

露天風呂では、誰もいなかった。景色を眺めると月夜が緑に映え始めた木々を照らした。不気味な美しさが闇夜に浮かんでいるようだった。桜の無いこの景色では春よりも秋に来るべきだと思った。

そんなことを考えながら風呂に浸かり、身体を温め、限界が来ては夜風で身体を冷やした。繰り返していくうちに思考は少しずつ鈍り投げやりな気分になっていく。

あいたい

七時半に風呂を出ると、携帯に翠からのメールが入っていた。

翠には二週間帰省していることにしていたが、実際には十日間帰省し、その後、幸子と合流している。

帰省のことを、一応笑顔で答えてくれたのに、二週間は長過ぎたかな。

幸子がまだ出てきていないのを確認し、翠に電話をかける。

「もしもし」

「ミキオ？」

「ゴメン、今風呂入っていたから」

いつもより元気のない声に少し心配になる。

「どうしたの」

僕は続ける。

「ちょっと悲しい映画を見たら声が聞きたくなつて」

汐らしい彼女の声は僕の頭を悩ませた。

「それだけ？」

「うん、それだけ。でも電話してくれてうれしかったよ」

ゆっくりしてきてね。

彼女はそう付け加えて電話を切った。本来なら、今すぐ帰るべきだろう。ゆっくりと携帯を畳みながら考える。

今帰るといったら幸子はなんて言うだろうか。

「翠から？」

いつの間にか風呂から上がってきた幸子が下から覗き込むように聞いてきた。

「うん」

彼女の顔は一瞬膨れっ面を見せた後にいたずらっぽく笑って見せた。幸子の普段あまり見せない表情の変化は可愛らしかった。

何故幸子とここにいるのだろうか。

ふと振り出しの疑問に戻りながら僕は幸子の顔を再び見た。

「ごめんね」

幸子が謝る。

「どうしたの。急に」

戸惑った。

「私、やっぱりミキオのこと好きだよ」

沈黙が二人の間を横切る。

「ごめん」

幸子は泣きそうな顔から笑顔を建て直す。

「ご飯食べよ」

笑顔で頷く。きっと今回はそれなりにうまく笑えた。

夕飯のしゃぶしゃぶは美味しかった。

肉を食べ、ビールを飲み、また肉を食い、日本酒を飲む。そして、少しずつ酔っていき、少しずつ愉快になっていった。

部屋へ戻り、敷かれた布団に飛び込む。眩暈のような睡魔が襲っ

てくる。

「ねえ」

幸子がキスをする。

「ミキオ」

そう言つてたくさんのキスをする。

首筋、頬に、馬乗りになり幸子の手ははだけた僕の胸に触れ、まだ濡れてい髪が頬にたれた。

何とか抵抗しようとする僅かばかりの理性とは別に、もう一人の本能はやる気満々になっていた。

本当は最初から解つていたんだ。

二人きりの旅行を決めたときから。

「知ってるよ」

幸子の言葉が思い出される。

頭をすばやく振り、マウントポジションに入れ替わる。

手を絡め、キスを返す。おでこに、顎に、鎖骨に、胸に。

ゴムを取り出そうとする間に幸子が上に乗る、そのまま幸子の中に吸い込まれた。

気持ちよくなればなるほど焦りが出る。

まずい、まずい。

心の中で呪文のように繰り返しながら最後は幸子を突き飛ばしていた。

「ごめん」

幸子は泣いていた。

ほとんど脱がされた浴衣と布団を汚したもう一人の僕は、情けないように萎れていた。

僕と同じように。

残りの二日間は気まずい雰囲気 flowed たまま過ごした。会話が少なく、ジーンギスカーは草の味がして不味かった。翠に会いたくなつてきていた。罪悪感を残したまま、幸子と別れ家に着きシャワーを

浴びると、翠にメールを送った。

ただいま

直ぐに翠から電話がかかり翠の家へと向かった。

三日間翠に元気をもらい、二人で大学に向かった。

新宿で翠と歩きながら、帰省時の話をする。携帯がなって直ぐ切れた。

寄り添う翠に取れなかった携帯を、翠が自分の携帯を覗いた瞬間に見た。

幸子からの電話だった。

僕は電話を畳み翠に向き直る。

「だれから？」

そう聞くと、

「サチから。今日大学休むって」

翠が答える。

サチという言葉に反応しそうになる。

「そうか」

僕はそう答え、急いで先ほどまでの話に戻す。ふと腕を引っ張る翠に、ドクンと心臓が高鳴る。

「ねえ、私たちも大学サボって携帯買いに行かない」

僕は何とか落ち着きを取り戻す。

「ああ、そっか。お前まだ写メついてないもんな。」

笑顔でごまかす。

僕等は雑踏の駅を抜け、外に出る。

近くの携帯ショップに向かう。

太陽は春だというのに、決して暑くないが刺さるような光を発する。

幸子のことをどうしようか。

考えながら見る空は晴れていた。

無駄に晴れていた。

幸子の場合

私は翠が嫌いだ。

大学に入ってから常に翠は隣にいた。

同じサークルに入り、同じ授業をとり、同じ人を好きになった。

ミキオに先に目をつけたのは私だった。

「ただデカいだけじゃん」

そう言っていた翠は、一カ月後にはミキオのことをよく聞いてくるようになった。

「ミキオっていつも何してるのかな」

「ミキオって、バスケ好きなの？」

「カラオケ何歌うのかな」

私が必死で集めた情報は直ぐに翠に流れた。

ここまではまだきつとすきだった。

「さち、ミキオのこと好きなの？」

「うん、まあね」

照れながら答える私に、

「じゃあ、宣戦布告するね」

そう言って笑顔を見せる彼女に、私はあつけにとられたままだった。

デカいだけと言った日から二ヶ月経った時だった。

「ごめん、さち、私ミキオと付き合うことになった」

勃発した戦争に、私はほとんど何も出来ずに一ヶ月で敗戦した。

翠以外に伝えていなかった恋心は、このまま誰に伝えることなく私は三日間泣き続けた。

三日間泣き続けた最後の日に、この恋は始まっていなかったのだと自分に言い聞かせた。

この頃から翠のことが嫌いになった。

翠の幸せは私の不幸だった。

翠が笑えば私は悲しみながら一緒に笑い、ミキオと喧嘩したと聞けば心の底で喜んだ。

翠とミキオは私に何人か男の人を紹介してくれた。合コンも開いてくれた。どの男もミキオほどいい男ではなかったし、まるで翠に情けをかけて貰っているようでむかついた。

「さち、誰かい人いた？」

翠が開いた合コンで一緒にトイレに行くとそう言ってきた。

ミキオがいい。

私は心で呟きながら翠をみる。

「なかなかね」

私は答える。

翠の紹介で付き合った人もいた。でも、やはりミキオのことが好きで直ぐに別れた。

ただ、翠のことは嫌いだったが、翠から学んだこともある。

それは、自分に素直に生きること。

だから私はミキオに告白することにした。

「私、ミキオのこと好きだよ」

テストが終わりミキオを呼び出し、開口一番私はそう言った。

ミキオの顔はみるみる困惑顔へと変わって言った。リトマス試験紙みたいでおかしかった。笑いそうになるのを堪え、ミキオの反応を待つ。

「どうして」

どうして？

好きに理由なんて必要か？

勝手にそんなことを思っていると、ミキオは続ける。

「ごめん」

やっぱりミキオはいい男だ。そう思いながら少し笑う。

「知ってるよ」

私は答える。

少しすつきりした瞬間、翠の幸せそうな顔が浮かんだ。なんだかムカついた。

「私の方こそごめん、翠がいるのを知りながらこんな告白なんかして」

そう言いながら、私は少しだけ落ち着いていた。落ち着くと何だか惜しい気がしてきた。

「ねえ、一つだけ我儘を聞いて」

ミキオは困った顔を崩さず、出来ることならと請合う。

「私を一回だけ旅行に連れて行って。私とミキオ二人だけで」

「それは無理だよ」

ミキオの答えにここで引くわけに行かない。

「そうすれば、ミキオのこと諦められるから」

私は感情的になる。慣れない感情というものに涙が溢れる。

「そうすれば翠との関係も崩れず三人の仲はこのままでいけると思うの」

「翠はこのこと知っているの？」

「翠は知らない。知らせないほうがいいと思う」

ミキオはしばらく考え、頷く。

「解った。一度だけ」

ミキオとの旅行は、春休みが終わる直前で、ミキオが帰省を終えた直後ということになった。

旅行までの二ヶ月間私は自分を磨いた。雑誌はいつも以上に熱心に読み。新しく服を買い。特にダイエットは、半身浴をし、果物ばかり食べ、ジムへ行くことによって、二ヶ月の間に三キロと少し痩せた。

旅行三日前には髪を切りにも行った。

恋の力って凄い。

自分の努力に感心しながら、当日の朝を迎えた。

「おまたせ」

ミキオが車のドアを開け、二泊三日の旅行が始まった。
遊園地へ行き、たくさんの乗り物に乗ったけれど、ほとんどの記憶はミキオの顔だった。

ミキオの驚いた顔、笑っている顔、絶叫している顔、振り向いた瞬間の顔。

やっぱり私はミキオが好きなんだ。

絶叫マシーンに乗りながら、

「ミキオ大すき」

なんて叫び声、ミキオには聞こえただろうけど、ミキオはこちらを振り向きもせずオーオー叫んでいた。

私は中学校の頃初めて行ったデートの遊園地を思い出し、一人で笑った。

「おなかすいた？」

陽が落ちても、ミキオはいつもの優しいミキオだ。

「すいた」

「じゃあ、そろそろ旅館に行くか」

「うん」

温泉は気持ちよかった。

ナトリウムイオン、塩化イオン、それぞれに数字が書いてあるがそれが身体にどういいのかわからなかったが、PH八で、アルカリ温泉であることはわかったけど、それだけだった。効能は筋肉痛、疲労、冷え性などが書かれている。傷心には効かないらしい。

景色は綺麗だった。桜の花は無かったけれども、夏でもないのに青く色付いた木々と音を立てながら流れる川を見ていると心が落ち着いていた。

一瞬だけミキオのことを忘れたが、少し時間がたてばミキオのことを考えていた。

ミキオを考えると必ず翠が顔を出した。

ミキオの隣にはいつも翠がいた。

ミキオと私の間には常に翠がいて、私をさそうのは常に翠だった。本当は翠にむかっていたんじゃない。でも憎まずにはられない。

自分自身の不甲斐無さに気がつくとき悲しくなってきた。ぽろぽろと流れる涙は止まらず顎から次々と落ちた。浴槽から出て、シャワーを顔から浴びる。

ただ無心に、心地よい温度に身をゆだねる。

風呂から出ると、身体を拭き帯を締めながら、気持ちも同時に締めなおす。

よし、行ける。

鏡の自分に向かって声をかける。

八時より少し早めに出ると、すでにミキオはいた。

ごめんだった？

その言葉は咽を超えることは無かった。牛の反芻のように、言葉はお腹の中へ戻り留まった。

ミキオは困惑顔のまま携帯を持っていて、私には気がつかない。帯の結び目にもう一度力を入れる。

ミキオが携帯を置くのと同時にミキオの元へ辿り着く。

「翠から？」

ミキオは隠さず頷く。

当然だろうけど。

また翠。

泣きそうになるのを堪え、笑顔を作る。

それも一瞬の間で悲しくなる。

好きな人と一緒にいるのに、唯苦しかった。ミキオはもつと苦しいのではないだろうか。

ふとそう思った。

「ごめんね」

「どうしたの。急に」

ミキオはこんな私にも優しい。

「私、やっぱりミキオのこと好きだよ」
時として言葉は漏れる。

「ごめん」

ミキオが謝る。

そんなつもりは無かったのに。

「ご飯食べよ」

私の言葉にミキオは笑顔を見せる。

ミキオの笑顔に救われた。

ありがとうミキオ。

聞こえないよう言ったらちよつと幸せな気分になった。

しゃぶしゃぶを食べながらお酒を飲むと、気まずかった雰囲気は
少しずつ溶けていった。

ミキオが肉を食べる姿は性欲的だった。

翠はもうミキオに触れている。

私の大好きなミキオに。

部屋に着くころには気持ちを抑えきれなくなっていた。

布団に飛び込むミキオに、

「ねえ」

多分私はそう言った。

感情のままにミキオに触れキスをする。

私の全てがミキオを求めた。纏れ合うように、思うままにセックスをした。

ミキオの上に乗る、私は腰を動かす。

感情は加速し、私は声を漏らす。

「ミキオ、ミキオ」

私は何度もミキオの名前を呼ぶ。

ミキオの子供が欲しい。

そう思った瞬間、私はしりもちをついていた。

突き飛ばされたんだ。気がついた途端涙が出た。ミキオの前では
泣かないって決めていたのに。
もうどうでもいいや。
私は思いつきり泣いた。

再び緑の場合

携帯を買い換えた。

「いいでしょ」

私は一緒に選んだミキオに十分自慢した後友達にメールを送った。最新式の機種に慣れない手つきで。

携帯換えました

「ねえ、どっか座ろ」

そう言って二人でコーヒーショップに入る。

店内ではコーヒーの香りが充満していた。この匂いが好きで高校のころは毎日のように通っていた。

いつもの様に、私はモカを頼みミキオはラテをたのむ。

店員の手はせわしなく動く。

コーヒー豆の匂いが香り立つ。

「トイレ行ってくるよ」

席をキープするとミキオは席を立った。

モカを一口飲むと甘い香りが鼻を抜ける。

携帯が鳴った。

今どこにいる？

幸子からのメールだった。

ミキオと新宿だよ

今からそっち行っている？

いいよ

私が携帯を置くのとミキオが戻ってきた。

「なんか、サチが来るって」

私は笑顔でミキオを見る。

「今？」

ミキオの質問に私は頷く。

「どうしたの？」

あんまり歓迎していないようだった。

「みどり」

そこまで言うと、幸子から電話がかかる。

「ちよつと待って、サチからだ」

ミキオの言葉を遮る。

「着いたよ。どこいる？」

入り口に幸子がいた。

私は手招いた。

サチは一步一步向かって来る。

私はモ力をもう一口含んだ。甘さが一瞬広がり、苦さが余韻を残した。

くしゃつとミキオがストローの袋を握りつぶした。

目の前に立つサチを見、ミキオを見た。

二人とも何も話さず、一瞬二人の視線が交差し、ミキオから外した。

「そと、まだ晴れていた？」

私の声だけが鈍く響いた。

多分

そとはまだ晴れている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4884a/>

そとはたぶん晴れている

2010年10月8日11時55分発行